外部評価報告書

令和元年7月

工学部

目　　次

Ⅰ まえがき　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ 外部評価実施概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅲ 外部評価委員会記録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅳ 外部評価委員会質疑応答・講評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

Ⅴ 外部評価結果調査票まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

Ⅵ あとがき　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

Ⅰ　まえがき

平成 16 年度に静岡大学が国立大学法人に移行して以来、平成 16～21 年度、平成 22～27 年度、平成 28～令和 3 年度の 3 期の中期目標・計画にしたがって工学部・工学専攻は様々な活動や改革を進めています。平成 25 年に学部改組を実施し、機械工学科、電気電子工学科、物質工学科、システム工学科の 4 学科から、機械工学科、電気電子工学科、電子物質科学科、化学バイオ工学科、数理システム工学科の 5 学科体制に改組し、平成 27 年度に工学研究科、情報学研究科、理学研究科、農学研究科を統合した、総合科学技術研究科が設立され、それぞれの研究科が専攻へと変更されました。これらの改組を通して、平成 25～30 年度の 6 年間、工学部、工学研究科および総合科学技術研究科工学専攻において、理工系ものづくり人材の育成、教員の研究力の向上、地域貢献・社会貢献の一層の進展を目標に、教職員、学生が力を合わせてより良い教育および研究を目指して活動して参りました。その成果として、多くの優秀な学生を輩出するとともに、独創的な研究成果の発信、産学連携の充実などを行っています。

今回の工学部・工学専攻の外部評価は法人化以降では 3 回目になります。平成 25～29 年度の 5 年間について、本学の評価会議が定めた 13 項目の評価基準に基づいて工学部・工学専攻が作成した自己評価書の事前検討、大学で行われた外部評価委員会での説明・質疑応答および教育研究施設の見学、委員会後の事後検討を経て、評価委員の皆様の忌憚のないご意見と評価を外部評価結果調査票にまとめていただきました。組織に関しては、ミッションはよく考えられており、目的達成に努力してほしい、また、学科構成がわかりにくいところがあり、特徴が高校生などにわかりやすく伝える広報が重要である、女性教員、外国人教員の比率を向上させるための具体策が必要であるなどのご意見をいただきました。教育面では、SSSV を高く評価していただいた一方、より英語能力を向上させることが必要であるとの指摘をいただきました。施設・設備に関しては、次世代ものづくり人材育成センターや図書館など、素晴らしい施設であるとの評価をいただきました。研究活動に関しては、高く評価をいただいた一方、論文数が減少していることに対する対策が望まれると指摘されました。地域貢献、国際化に関しては、高い評価をいただき、特に SSSV の拡充、ABP の取り組みの充実化に対するコメントをいただきました。今回いただいた貴重なご意見やご指摘を重く受け止めて、今後の工学部・工学専攻の発展に生かしていく所存です。

外部評価委員として、研究科長として大学の教育研究に造詣の深く研究科の改革を先進的に進めておられる加藤純一広島大学大学院教授、地域の代表的な進学校で工学部に多くの学生が入学する高校の赤塚顕宏静岡県立磐田南高等学校校長、地元の自治体の関係者と

して渡瀬充雄浜松市役所産業部長、地域の代表的な製造メーカーで工学部の多くの卒業生が就職する企業の松山智彦ヤマハ発動機株式会社執行役員、工学部の卒業生で同窓会会長を務められている藤井彰浜松工業会会長の 5 名の皆様にお願いしました。また外部評価委員長には、互選により加藤教授に努めていただくことになりました。この間、 多くの時間と労力を割いて外部評価を行っていただいた評価委員の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後に、膨大な資料の収集・整理、自己報告書の作成、外部評価の準備、本報告書の作成に尽力をいただきました工学部評価実施委員会委員の皆様をはじめとする多くの教職員の皆様に深く感謝いたします。

令和元年 6 月 27 日

静岡大学工学部長

川 田　善 正

Ⅱ　外部評価実施概要

1. 外部評価の目的

学外の有識者に外部評価委員を委嘱し、静岡大学工学部・工学研究科の教育、研究、社会連携、国際交流及び組織について、評価及び将来の提言を受け、本学部の諸活動の改善、活性化 に役立てるものとする。

2. 外部評価の実施方法

(1)自己評価書、参考資料及び外部評価票を事前に外部評価委員に送付し、事前調査を受ける。

(2)外部評価委員会を開催し、組織の概要・自己評価結果の説明、施設・設備等の見学・調査と質疑応答を行う。

(3)外部評価委員会から、委員会開催当日に、事前調査及び当日調査の結果に基づき講評を受ける。

(4)外部評価委員から、事前調査及び当日調査の結果に基づき、後日、外部評価票の回答を受ける。

(5)外部評価結果を報告書にまとめて公表する

3. 外部評価委員

大学関係	加藤純一，広島大学大学院先端物質科学研究科　研究科長
高校関係	赤塚顕宏，静岡県立磐田南高等学校　校長
自治体	渡瀬充雄，浜松市産業部　部長
産業界	松山智彦，ヤマハ発動機株式会社　執行役員
卒業生	藤井　彰，浜松工業会会長

Ⅲ　外部評価委員会記録

2019 年度　工学部外部評価委員会

１．日　程

日　時：令和元年 5 月 27 日(月)　12 時 00 分～16 時 00 分

場　所：浜松キャンパス　S-Port 3 階　大会議室

出席者：別紙名簿のとおり
外部評価委員　5 名
大学側　　5 名
陪席者　　15 名

司会進行：　副学部長

13:00-13:05	工学部長挨拶
13:05-13:10	大学側出席者紹介
13:10-13:20	外部評価委員から自己紹介 委員長選出（加藤委員を委員長に選出した）
13:20-13:50	自己評価の説明
13:50-14:30	質疑応答
14:30-15:00	施設・設備の視察・調査 （附属図書館浜松分館、次世代ものづくり人材育成センター、浜松キャンパス共同利用機器センター）
15:00-15:10	休憩
15:10-15:35	外部評価委員のみの委員会（学部長室）
15:35-16:00	講評

２．出席者名簿

外部評価委員

加藤　純一	広島大学大学院先端物質科学研究科　研究科長
赤塚　顕宏	静岡県立磐田南高等学校　校長
渡瀬　充雄	浜松市産業部　部長
松山　智彦	ヤマハ発動機株式会社　執行役員
藤井　　彰	浜松工業会　会長

大学側出席者

川田　善正	工学部長
木村　元彦	工学部副学部長
喜多　隆介	工学部副学部長
金原　和秀	2018 年度工学部評価実施委員長
鈴木　康之	2019 年度工学部評価実施委員長

陪席者

早川　邦夫	工学部機械工学科　副学科長
犬塚　博	工学部電気電子工学科　学科長
昆野　昭則	工学部電子物質科学科　学科長
孔　　昌一	工学部化学バイオ工学科　学科長
宮崎　倫子	工学部数理システム工学科　学科長
古門　聡士	工学部共通講座会議　議長
坂田　肇	工学部長補佐
下村　勝	工学部長補佐　　14:30 視察・調査から参加
福田　允宏	工学部長補佐
二又　裕之	工学部長補佐
宮原　高志	工学部長補佐

事務局

田中　晃人	浜松キャンパス事務部長
西山　卓男	浜松総務課　課長
久保田　政雄	浜松総務課　副課長（企画総務/統合）
山田　猛	浜松総務課　副課長（情報/工学）

Ⅳ　外部評価委員会質疑応答・講評

＜質疑応答＞

加藤委員長

・国際化が進んできていると思います。ABP が成功している要因は何かあるのですか？

（川田学部長）タイやベトナムなど、担当者が直接行って現地の高校などでも説明会を開催しているものです。

・SSSV についても、良い試みと思います。

（川田学部長）継続的に行うには経済的基盤の充実が必要と考えています。

・企業からは学生の英語能力に関する問題が指摘されていますが、何か取り組みはありますか？

（川田学部長）英会話の放課後教室を開いています。今後は参加しない学生への対策が必要と考えます。留学生が増えているので、うまくシステム化できればと思います。

松山委員

・地元企業としてもアセアン各国の企業と競争しているところがあり、英語能力を重視しています。また、ABP にも期待しているところです。今後は、インドなども対象国としていく必要があると思います。

（川田学部長）ABP 学生の国内の就職先が開拓していければ、ABP 留学生の増員や対象国を広げることも可能と考えられます。

・学生の TOEIC スコアの平均が 520 くらいであるが、最低 600 は欲しいと考えます。

（川田学部長）大学院入試に TOEIC が必要であり、今後もスコアアップに努力したいと思います。

藤井委員

・大学の理念の中の「創造性」については、どういった評価をしていますか？今回の添付資料にはその辺の評価が見当たらない。例えば、創造教育の実施の前後でデザイン能力が向上したとかの評価はあるのですか？

（川田学部長）JABEE では、項目別に学生が評価し、授業評価とリンクしています。多様性、創造性の評価については、今後検討したいと思います。

・平成 25 年の改組は学生からのニーズに基づき実施したものですか？

（川田学部長）大学として今後何を伸ばすのかという観点で検討を行い、研究所の教員を教員組織に入れるなど、幅広い教育ができるように改組したものであります。

渡瀬委員

・評価はどのようにフィードバックしているのですか？

（川田学部長）各教員の評価には、論文や外部資金の獲得だけでなく、学生アンケートの結

果も加味しています。単に研究だけではなく、地域貢献・社会貢献も考慮しています。

赤塚委員

・専門と教養のバランスが良いカリキュラムであると思います。来年度から入試科目に英語を入れるのは、何らかの検証の結果そうしたのですか？

（川田学部長）これからのグローバル化を達成するうえでは、入学時にける英語能力の判定が必要との判断であります。

・単位と授業時間の考え方の関係では、自習時間は確保されているのですか？

（川田学部長）キャップ制を導入するなど、自習時間の確保に努めています。

渡瀬委員

・工学部と情報学部の学部間の交流はあるのですか？

（川田学部長）学部教育では特に設定したものはありませんが、大学院では、産業イノベーションプラグラムなどの共通のコース・プログラムを設けています。

藤原委員

・意見として、ABP の学生との積極的な交流プログラムを検討して欲しいと思います。
また、対象国としてインドは今後必要であると考えます。

加藤委員長

・ABP に関しては、一部の教員が頑張って引っ張っている感じがするので、全体として推進していっていただきたいと思います。

（川田学部長）今後は点ではなく、面の交流を推進していきたいと考えます。また、インドについては、コネクションを持つ教員がいるので、それを生かすことができるのではと思います。

・AO、推薦の人数が多い気がします。他大学では AO を無くして、推薦を増やしているところがあります。

（川田学部長）AO,推薦を実施することで一般入試の倍率が少し上がるという効果があります。推薦入試には工業高校も含んでいます。

赤塚委員

・センター試験を課す推薦は普通高校に対しては OK であるが、工業高校は無くてもよいのではないでしょうか。

（川田学部長）今後考えたいと思います。

藤原委員

・特徴のある学生というのは一定数必要と思います。

・情報公開に対する意見などは外部からよく来たりしますか？

（川田学部長）特にありません。月 1 回程度 HP の外部からのアクセス数を調査しています。

・HP の中に回答欄があると良いと思います。

（川田学部長）今後検討したいと思います。

松山委員

・地元企業との連携はどのように進めようと考えていますか？

（川田学部長）マッチングが出来るような機会を今後増やしていきたいと思います。

＜講評＞

加藤委員長より

基準 1：組織の目的について

・ミッションはよく考えられていると思いました。引き続き目的達成に努力していただきたいと思います。

・「仁愛」という言葉は、今の高校生に理解されるのかが懸念されます。時代に合った新しい言葉に置き換えていくことも必要かと思いました。

基準 2：教育研究組織構成について

・電気・電子工学科と電子物質科学科の違いが分かりづらいのではないかと思いました。高校の生徒と先生に特徴や目標が分かるように広報に勤めて欲しいと思いました。

・改組したことが良かったのか？機能しているのか？改組した組織自体が機能しているのかも含め、改善のためのフィードバックが必要であると思いました。

基準 3：教員及び教育支援者等について

・女性教員、外国人教員の割合が低いと思いました。本部の方針にどうこたえるのか、具体策が必要であると思います。

・テニュアトラック教員をもう少し多くする必要があると思いました。他大学では、助教・准教授の新規採用は全てテニュアトラックとするところもあります。

基準 4：学生の受入について

・入試ミスをなくす努力が必要であると思いました。情報は入試本部にすぐに伝え、迅速な対処をする体制が必要であると思います。

基準 5：教育内容及び方法について

・SSSV は非常に良い取り組みであると思いました。全員が参加するのは財政的に無理があると思いますが、なるべく多くの学生が参加できると良いと思います。

・訪問先も、大学や研究所だけではなく、浜松の企業の海外オフィスなども活用可能であると思います。

基準 6：学習成果について

・学生の英語能力の改善が必要であると思いました。

基準 7：施設・設備及び学生支援について

・施設面では、次世代ものづくり人材育成センターや附属図書館など、素晴らしい施設であると思いました。

・学科混成で教育するだけではなく、選択した学生には、学部として尖っている部分を教えるカリキュラムも考えてはどうかと思いました。

基準 8：内部質保証システムについて

・JABEE やそれに準じた評価については、結果を公表するだけではなく、意見をフィードバックすることも重要であると思いました。

基準 9：財務基盤及び管理運営について

・管理体制は OK であると思いましたが、財務に関するデータがありませんでした。

基準 10：教育情報等の公表について

・意見を収集してフィードバックするシステムが必要であると思いました。

基準 11：研究活動の状況及び成果について

・論文数が毎年減少している傾向にあります。何報も出している教員よりも、0 の教員には面接して 1 にするなど、努力させることも必要であると思いました。

基準 12：地域貢献活動の状況について

地域貢献については活発に行われていると思いました。

基準 13：国際化の状況について

SSSV の拡張に勤めて欲しいと思います。また、ABP は非常に良い取り組みであり、ぜひ拡大する方向で検討して欲しいと思いました。

以上

Ⅴ　外部評価結果調査票　まとめ

外部評価委員（A～E の５名、順不同）より、自己評価書による事前の検討、大学での説明・質疑応答・見学を含む外部評価委員会、および事後の検討を経て提出していただいた外部評価結果調査票における評価点および評価コメントをまとめて以下に示す。

【外部評価結果調査票における評価点のまとめ】

４点：十分に達成している。大いに期待できる水準である。

３点：概ね達成している。概ね適切・良好である。

２点：改善が必要である。

１点：抜本的な改善が必要である。

評価項目	外部評価委員評価点					平均評価点
	A 委員	B 委員	C 委員	D 委員	E 委員	
基準 1　組織の目的について	4	4	4	3	4	3.8
基準 2　教育研究組織構成について	4	4	4	3	4	3.8
基準 3　教員及び教育支援者等について	3	3	3	2	4	3
基準 4　学生の受入について	4	4	4	4	3	3.8
基準 5　教育内容及び方法について	4	4	4	4	4	4
基準 6　学習成果について	3	3	4	3	3	3.2
基準 7　施設・設備及び学生支援について	4	3	3	4	4	3.6
基準 8　内部質保証システムについて	3	4	3	3	4	3.4
基準 9　財務基盤及び管理運営について	3	3	4	2	3	3
基準 10　教育情報等の公表について	3	4	4	3	4	3.6
基準 11　研究活動の状況及び成果について	3	3	3	2	3	2.8
基準 12　地域貢献活動の状況について	4	4	4	4	4	4
基準 13　国際化の状況について	4	3	3	4	3	3.4
全体評価の平均点	3.54	3.54	3.62	3.15	3.62	3.49

【各委員評価点及びコメント】

【基準１】組織の目的について

工学部の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

A 委員：評価点［４］
コメント：「仁愛を基礎にした自由啓発」、「ものづくりを基盤とし実学を重視した専門教育」、「地域社会・産業との連携」を掲げる「工学部の目的」は極めて明確である。また、教育、研究、社会貢献の目標も明確に規定されている。
これらの文言は崇高なものであり手を加える必要はまったくない。しかし、これから静岡大学工学部を目指そうとする若者にとってあまり馴染みのない語句（たとえば「仁愛」）が含まれているようにも思える。若者にも工学部の精神が十分に理解できるよう、広報の場では表現を工夫する必要があると考える。

B 委員：評価点［４］
コメント：理念並びに教育に関する目標、研究に関する目標、社会との連携、国際交流に関する目標ともに計画に定められ、学校教育法の大学の目的にも合致している。

C 委員：評価点［４］
コメント：工学部規則の目標を「ものづくりを基盤とした、～人事育成、～研究、～貢献、を通し『社会から期待される学部』」と簡潔に表現され、ＨＰやガイドブック等でしっかりと目指すべき姿を分かり易く伝えていることがよい。ただ、浜松高等工業学校時代からの「仁愛を基礎にした自由啓発」の継承についての意味は、学生等には少し分かりにくいように思われる。
なお、修学期間において広く工学を俯瞰できる力を養い、卒業・終了後において複合的な問題に取り組めるようにすることは大事なことであり、地域の将来を担ってもらえる人材の輩出に期待する。

D 委員：評価点［３］
コメント：目的・理念・目標は明確であり、それを基準にして各活動に展開されている。
高校生・在校生に判りやすく説明する活動も必要と感じる。

E 委員：評価点［４］
コメント：組織の目的については、教育目標、研究目標、社会貢献目標で定められており、基礎力と実践力を備えた人材育成の為の教育方法もきめ細かく設定されている。学生にもいろいろな機会を活用して、周知している。
学士課程、大学院課程とも教育目標は工学部規則や工学部中期計画、学生便覧等多くの資料や配布物、web などで明確に記載し公開されており、教育法にも合致していると言える。
ものつくりを基礎とした本大学特有の人材育成は、素晴らしいものであり、もっと多くの全国の受験生に理解される工夫を更にお願いしたい。

【基準２】教育研究組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、工学部の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

A 委員：評価点［４］

コメント：数年前の学部改組は、世の中の情勢・要請ならびに静岡大学工学部の強みを十二分に鑑みたものであることが分かる。その中で新に数理システム工学および電子物質科学の学科が誕生した。ただ学科名のみでは、これら学科を誕生させた理由ならびに学科の目指すもの（どのような学生を育てたいのか？）や特徴が分かりづらい。学科のウェブサイトなどを利用し、十分な説明を公開してほしい。

また、設置審の期間がもうすぐ切れるのに合わせ、今回の改組の内部評価を行い、さらなる組織の向上をはかってほしい。

B 委員：評価点［４］

コメント：工学部は５学科体制さらには学科の中にコースを設け、目的とする人材育成を行っており、適切である。

教授会、教務委員会等の目的は明確に定められており、月１回の定例会のほか、必要に応じて開催されているとのことで、課題となるようなことは認められない。

C 委員：評価点［４］

コメント：工学部の基本であるものづくり教育を進めるための「次世代ものづくりセンター」での基礎学習と創造教育実習は、大学へ入った学生にとって、自ら考え、行動する力を養う上でとても有益であり、これを基礎に、専門課程へとしっかりリンクしているところが良い。

また、平成 25 年度に学科専攻の改組で、光ナノテクノロジー、バイオや計算科学などの分野の展開を図っていることや、修士課程では平成 30 年度から産業イノベーション人材プログラムで地域産業界との連携の中、多様化する社会において、学部の目標となる主体性を持ち独創性豊かな技術者の育成に努めていることは評価できる。

D 委員：評価点［３］

コメント：５年前の改組に対してどう評価しているか？

評価及び Feedback System の仕組み構築を望む。

E 委員：評価点［４］

コメント：組織構成は目的に合致し、社会環境の変化にも適切に対応した構成になっている。

ものつくり人材育成セターは、単なる実技体験に留まらず大学の理念や教育目的に合致したものであり、グループ学習などによる学生の創造性リーダーシップの育成や協調性の育成に役立つ内容となっている事が確認できた。

平成 25 年に改組した 5 学科の内、電気電子工学科と電子物質科学科は本学部の誇る特徴的な学科と思うが、どちらの科にも電子の文字が有り受験生や外部の人には、その違いや特徴が解りにくいので、各科の目的や狙いを更に分かりやすいものにする工夫をお願いしたい。

一度外部のアンケートを取ってみるのも如何でしょうか。

【基準３】教員及び教育支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。
教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。
教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

A 委員：評価点［３］
コメント：工学部の教育・研究を行うのに十分な人員が配置されていると考える。ただ、女性教員や外国人教員の比率はまだまだ低い。外国人教員については、一定期間以上海外で教育・研究に携わった日本人も含めて考えて（外国人「等」教員）拡充を図り、国際化の向上に努めてほしい。女性教員については、工学を専門とする女性教員の母数の少なさからその教員確保が難しいことは理解できる。しかし、現在の男女機会均等の流れを尊重し、女性教員拡充の努力を続けてほしい。

B 委員：評価点［３］
コメント：専任教員は設置基準を満たしており、適切な状態であると認められます。採用についても適切に運用されているものと思われます。教員の評価についても、適切な基準により、組織的、継続的に実施されていることが認められます。
外国語教員数と女性教員数の割合が少ないとの自己評価から、増加につながる方策をご検討ください。

C 委員：評価点［３］
コメント：専任教員一人あたり学生数は、平成 30 年度 14.6 人で、平成 24 年度の 16.4 人からは減となっている。また、女性教員は 3 人が 5 人、外国人教員は 3 人が 9 人と増加しており、教員配置については、適切な運営を行っていると思われるが、よりきめ細かな指導による教育の質の向上に向けて、更なる教員配置の充実が望ましい。
また、大学教育が有効に機能するためには、教員の教育・研究指導能力の向上が大事である。授業アンケートを授業改善に繋げている取り組みのように客観的視野をしっかりフィードバックして質の向上に努めてほしい。

D 委員：評価点［２］
コメント：ダイバーシティへの取組みが今後は求められる。計画的な外国人・女性教員の採用が必要。教員１人あたり学生数は、本来あるべき姿（目標値）を持ってモニタすべきと思われる。

E 委員：評価点［４］
コメント：限られた人員で、教員は適切に重点配置され、不足は連携を強化して対応し、効率化への取り組みにも努力されている。
しかしながら専任教員一人当たりの学生数は、14.6 人と他大学と比較しても多く、質の高い教育研究をしていく為にも増員が必要と思われる。
教員の活力向上、活性化の為にも更なるテニュアトラック教員の採用を増やしていく必要があると思われる。
外人教員は少しずつ増えているものの、女性教員は少なく、応募が増えるように大学の魅力をアップし、アピールしてほしい。

【基準４】学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

A 委員：評価点［４］

コメント：アドミッションポリシーは明確化されており、それに沿った入試制度を確立していると判断する。ここ 5 年の定員充足率は 101～104%で極めて良好に学生の受け入れを行っている。また、地元（静岡県、愛知県）出身の学生の比率はおよそ 50%で、地元の優秀な学生の確保に対する努力が認められる。

教育の目的（国際的に活躍できる人材の育成）ならびに企業のアンケートに対する回答（英語能力に対するネガティブな回答が比較的多い）ことを鑑みるならば、入試科目に英語を加えるのは必須であると考える。

B 委員：評価点［４］

コメント：アドミッションポリシーは明確に定められており、適切であると考えます。

どのような学生を受け入れるかについては、大学入試の種類や課す教科科目、その配点による部分もありますが、入試戦略・学生支援企画室にて検討され、変更しているところも適切であると思います。

具体的には、英語の基礎学力を重視する方向への変更であり、大学の受入れ方針をより強く打ち出したものと理解できます。

C 委員：評価点［４］

コメント：工学部の目的としっかりリンクしてアドミッション・ポリシーが明確に定められており、ＨＰなどで求める学生像として「育てる人間像」「目指す教育」「入学を期待する学生像」として分かり易く示されている。そして、それに沿った学生の受け入れのための入試試験の面接において、ものづくりへの興味を確認するため、実物を見せての質問や実験、集団討論などで確認が行われていることは良い。

ただ、入試試験事務におけるミスが過去に繰り返して発生していることは、チェックリストを作って対応しているようだが、今一度、再発防止の徹底を図る必要がある。

D 委員：評価点［４］

コメント：アドミッション・ポリシーは明確で“ものづくり”への想いを強く感じる事が出来る。

E 委員：評価点［３］

コメント：アドミッションポリシーは明確であり、ポリシーに沿った多様な受け入れが行われている。選抜も公正に行われており、毎年入試戦略を検討し色々な改善に結び付ける活動をしている。

強いて言えば、選抜受け入れの違いによる学生の資質評価結果が確認できなかったので、改善をお願いしたい。

また成績偏差値が平均的な能力の学生ばかりでなく、何かに秀でた特徴のある学生を受け入れる選抜方式や、質の高い受験生が浜松を目指す様に、大学の特徴、特色をもっとアピールする取組も、必要と思われる。

【基準５】教育内容及び方法について

教育課程方針が、学位授与方針と整合的であるか。
教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。
教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等（研究・論文指導を含む。）が整備されているか。
学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっているか。
学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。
教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

A 委員：評価点［４］
コメント：教育課程方針は学位授与方針と整合的である。教育課程の編成・実施方針は明確に定められており、教育課程はそれに基づき体系的に編成されている。また、その内容や水準は工学士の授与に適切なものである。授業、演習等はこれらの方針に則って行われていると判断する。
報告書にも記載されているように、設置審の期間の終了を迎えるにあたり、カリキュラムの編成について内部評価を行い、さらなる向上をはかってほしい。

B 委員：評価点［４］
コメント：カリキュラムポリシー、教育課程ともに適切であると考えます。教養の幅を広げる科目と専門性を深める科目をバランスよく学ぶことができるカリキュラムになっており、また、そのような教育体系が学生便覧等に丁寧に記載されています。
多様な学習ニーズに対応する取組も評価できます。しかし、多様であるだけに、活用する学生が必ずしも多くはない状況も見受けられます。
高等学校教諭１種（工業）の免許取得も可能ではありますが、取得者は多くないようです。ニーズがないのか、取得に何らかの障害となることがあるのか、検証の機会があればお願いします。

C 委員：評価点［４］
コメント：学位授与方針に基づいたカリキュラム・ポリシーがしっかりと示されており、これに従い、特に国際感覚や問題発見・解決能力などを身に着けるための教養科目を重視した履修体系に繋げていることは、幅広い教養と柔軟なバランス感覚を持った社会人の育成に向けたものとして評価できる。
そして、授業形態では、理論と実習をしっかりと押さえるとともに、教員による教材開発や大学院生によるＴＡの活用を図るなど、学習指導において工夫されているところが良い。ＳＳＳＶプログラムにおける英語による原稿執筆や海外の研究室でのプレゼンテーションなどは、国際的な展開を図る技術者養成に大変意義のあるプログラムと思われるので、更に取得者数を増やしていってほしい。

C 委員：評価点［４］
コメント：国際感覚を持った技術者を育成するためのプログラムが充実している。
他大学との差別化や企業からの評価を上げるためには、さらに強みを生かしたい。具体的には“ＳＳＳＶ”は、学生全員に課したらどうか？地元企業の海外拠点を利用すれば実現可能と思われる。

D 委員：評価点［４］
コメント：カリキュラムは体系的によく整備されており、学生にも分かりやすいものになっている。
学生のニーズや社会の変化にも対応して整備された内容になっている。
講義と演習、実験、実習などがバランスよく組み合わされている良い教育内容となっている。
次世代人材育成センターの教育方法は、大学の理念である仁愛を基礎にした自由啓発と言う､独りよがりな人にならない様にと言う精神を肌で感じ学ぶ場となっていると思われる。
他学科の履修を必須とし、共同事業や社会人の受け入れ等で、幅広い視野を持たせる取り組みもある。
成績評価の基準も明確で、学生に周知され、結果の確認もでき、異議申し立ての仕組みも整備されている。評価の客観性や厳格性も担保出来ている。

【基準６】学習成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして､学生が身に付けるべき知識･技能･態度等について、学習成果が上がっているか。
卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

A 委員：評価点［３］
コメント：在学生、卒業生、企業へのアンケートの結果から学習成果について判断する。
・専門科目および教養科目の学習成果は十分なものがあると判断する。
・ただし､「市民としての見識」に関してはネガティブな回答が若干多い。市民としての見識は教養科目と多少関連するところがあるので、教養科目の工夫である程度対処できるのではないか？
・英語学習に関してはさらに向上させるために一考の余地がある。企業からの回答でネガティブな回答の割合が最も多かったのが英語能力である。企業が評価したのは英語でのコミュニケーションと英語文書の理解度だと思われる。この企業の英語能力に対する要請と、学部での英語学習の内容にもしかするとずれがあるのかもしれない。英語でのコミュニケーションと英語文書の理解度は企業だけでなく､学や官の分野でも重要である。在学生のアンケート結果でも､「変化なし（つまり効果なしと同意か？)」の割合が大きい。能力別のクラスを設けたり、商業的な英語コースを取り入れたりなどの少なからずの工夫はこれまでもなされているが、英語学習の内容について今一度の検討が必要なのではないだろうか？
英語コミュニケーション能力の向上に対し､ABP や SSSV の活動および関連活動は多いに貢献するであろう。これら活動を積極的に、かつ幅広く活用するのもひとつの手であると考える。

B 委員：評価点［３］
コメント：最近の５年間を比較したとき、卒業研究履修資格取得者の割合が増加しており、学習成果も良好であるものと考えられます。企業側からの評価も高く、教育の目標が達成できていると思われます。
アンケートによれば、英語能力、国際的視野、リーダーシップに関する項目は、相対的にやや評価が低い傾向にあり、要因を分析しつつ、さらなる向上を目指していただけるとよいと思われます。

C 委員：評価点［4］
コメント：卒業資格取得状況において、標準卒業年限者が 70%から 80%台に延びてきていることは、学習成果が上がってきていることと思われる。
卒業生の項目別習熟度のアンケートにおいて「とても」と「やや」身についたという割合が、専門分野に関する知識・技術、幅広い基礎学習力、問題発見・分析・解決能力、プレゼン能力といったところが高く表れているとともに、企業側からの意見も同様に高く評価されていることは、一定の学習成果が出ているものと評価する。
ただ、英語能力や国際的視野の評価がやや低いところについては、教育目標の最初に国際感覚を持つ人材育成を掲げているため、更なる工夫が必要と考える。

D 委員：評価点［3］
コメント：英語教育に関する評価が、自己評価と企業評価がマッチしていない。
ＴＯＥＩＣを指標とするなら、企業が求めるレベルを明確にすべき。（当社では 600 点）
ＳＳＳＶが有効ならば、活動の展開を考えるべき。

E 委員：評価点［3］
コメント：学生の就職状況や、学外のアンケート結果からみれば、学生として身につけるべき知識、技術、態度は備えられ期待すべき学生が育成出来ていると思われる。
但し大学の理念でもある仁愛、独創性、先見性等は、評価が困難であるが卒論などで多少の評価を入れて判断できるように出来ないものか。
標準年での卒業率は向上しており、大学の努力は評価したいが、学生側に甘えの構図が出来ないか気になる点もある。

【基準７】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。
学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

A 委員：評価点［４］
コメント：特に次世代ものづくり人材育成センターおよび図書館はすばらしい。ぜひ、これら施設を十分活用して学習成果の向上を図ってほしい。
教育研究環境（講義室、ICT 環境、図書館、研究設備、研究室等）は整備され、有効に活用されていると判断する。また、履修指導や学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援も十分なされている。
一方、学食や購買部はキャンパスの規模からみてまた十分設備されているとは思えない。一層の改善を図ってほしい。
今回の外部評価委員会で、「オフィシャル」には冷房が使用できない状況だった。気温が異常に高かったり、低かったりする時に空調が利用できないと、学習効果は著しく低下する。そのような状況に陥らないように、計画的な電力利用を策定し、その実施を徹底する必要がある。

B 委員：評価点［３］
コメント：学習支援に関しては、機能的で快適な環境が整備されている。また、学生便覧、学生生活の手引き、履修案内、授業時間割等で詳細に記述されているほか、ガイダンスの実施、複数指導教員制等により、学生への指導、支援が適切に行われていると思われる。
しかしながら、学生食堂の収容人数が十分ではなく、また、学生寮が不足していることに関しては、早期の改善をお願いしたい。

C 委員：評価点［３］
コメント：施設・設備等については、老朽化対応として、ものづくり館の建て替えを行うなど鋭意に対応しているとみられるが、学生数に応じた食堂の整備などまだまだ課題が残っている。
また、2018 年に県内で初めて無線ＬＡＮ相互利用サービスを導入するなど、ＩＣＴ環境の充実に努めていることは良い。

D 委員：評価点［４］
コメント：図書館、ものづくり人材育成センター共にすばらしい設備で、運用ポリシーも非常に良い。
ものづくり人材育成センターは、静大工学部でしかできない“とがった技術者”育成を提案したい。
浜松の地の利を生かして“光”“音”“ロボティクス”などの世界一技術習得を目指したらどうか？

E 委員：評価点［４］
コメント：教育に必要な施設はしっかり整備されている。人材育成センターや共同利用機器センターは、優れた施設である。またここ数年で新講義棟図書館等が新設され、学生たちが自主的に学ぶ環境が整備されてきた。
耐震化やバリアフリー、防犯対策も、適切に実施されている。
反転授業サービスや、学務情報システムなどで就学に対する支援はしっかり出来ている。
施設関係は、施設マネジメント委員会で定期的に議論され改善されてきている。学生の支援もきめ細かく出来ているが、教員の不足が危惧される。
人員増も検討が必要ではないか。

【基準８】内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

A 委員：評価点［３］
コメント：JABEE そのもの、JABEE に準じた内部質保証システムを完備し運用しているのは評価できる。
評価の実行に加え、企業等から内部質保証に関する意見を収集し、システムの有効性について検証してほしい。

B 委員：評価点［４］
コメント：教育の質の向上、改善のための取組が適切に行われていると考えます。

C 委員：評価点［３］
コメント：教務、ＦＤ委員会やＪＡＢＥＥを導入するなど、概ね適切に点検・評価され、教育の質の向上に努めていると思われる。
また、学生からの授業アンケートを教員にフィードバックし、更に、学生に対して「アンケート結果に応えて」という形で改善を図っているところは評価できる。

D 委員：評価点［３］
コメント：各活動について機能していると思われる。
評価し、Feedback し、改善を促すシステムの記述があると更に良いと感じる。

E 委員：評価点［４］
コメント：学内に教務委員会、FD 委員会、評価委員会が設置され、評価のシステムがきちんと機能している。外部評価も実施され、外部から有意義な意見を取り入れ，質の向上を図っている。
内部評価では学生もメンバーに入れて意見を聴取し質の向上に役立てている内容は web でも公開されているが、学外からの意見の収集はされているのか確認できなかったが、あれば公開も検討して欲しい。
向上活動はされているが、何をどの様に改善したのか、出来る限り公開して頂けたらと思います。

【基準９】財務基盤及び管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。
教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されているか。

A 委員：評価点［３］
コメント：管理運営のための体制は適切であり、運用もしっかり行われている。財政基盤についてはデータがわずかなので判断できない。

B 委員：評価点［３］
コメント：概ね、適切に機能されているように思われるが、教員と職員の共同、事務職員の効率的な運用体制に若干の課題があるように見受けられる。

C 委員：評価点［４］
コメント：管理運営については、適切に整備され機能していると考える。

D 委員：評価点［２］
コメント：管理運営に関しては、問題ない。
財務基盤については提示された資料では評価できない。
大学の法人化によって収入を増やす活動（共同研究）、固定費の改善（経費・研究費の有効性）が必要ではないか？

E 委員：評価点［３］
コメント：管理運営のために事務部が、また教育研究支援の為には技術部が設置され適切に運営されていることが確認できた。情報学部との連携を強化し統括組織として効率化を図っている。
危機管理体制と危機管理マニュアルが整備され、危機対応能力の向上が図られている。
事務職員の能力向上の取り組みはなされていると思われるが、具体的な活動内容については確認評価出来なかったので今後は結果を公開すべき。
財務基盤、財政運営は総務係が行っていると思われるが、実態は確認出来ず、評価が困難であった。改善をお願いしたい。

【基準１０】教育情報等の公表について

工学部の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

A 委員：評価点［３］
コメント：教育情報等の公表は適切かつ十分になされている。それに加え、公開情報に関するパブリックコメントの収集も積極的に行い、コメントをもとにフィードバックをかけるよう努めてほしい。

B 委員：評価点［４］
コメント：教育情報が適切に公表されている。

C 委員：評価点［４］
コメント：適切に公表されており、ＨＰも充実してとても分かり易くて良い。

D 委員：評価点［３］
コメント：十分な情報が公表されている。
最近の高校生・在学生・企業への発信は新しいＩＴツール利用も検討してみたらどうか？
例．ＳＮＳで高校生へ発信。
企業向け研究紹介のＷｅｂ改善。

E 委員：評価点［４］
コメント：工学部の教育研究活動の情報は web で詳細に公開されている。
外部評価している 13 項目をはじめ、教員データベースなど、知りたい事は Web ですべて確認でき、説明責任は果たされていると言える。
評価項目とは別に、せっかく公開しているので学内外を問わず、色々な有益な意見を回収する仕組みの有無は今回の資料では確認できなかったが、出来れば公開してほしいと思います。

【基準１１】研究活動の状況及び成果について

工学部の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。
工学部の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

A 委員：評価点［３］
コメント：科研費をはじめとする研究費の獲得はすばらしいものがある。
一方、研究成果の発表（特に原著論文の発表）には多少懸念がある。一人当たりの平均年間論文発表数が 2.7 なのはすばらしい。しかし、年間の論文発表数は年々減少する方向にある。これにどう対処するのか？
・多数の論文を発表している教員は何も言わなくともそのパフォーマンスを維持し続ける。考慮するのはほとんど論文を公表していない教員である。今回の報告書では各教員の年間論文発表数のヒストグラムが載っていないので、正確な状況は把握できないが、おそらく年間論文発表数が 0 および 1 報の教員が半数程度を占めているのではないかと推察する。この数値が 0→1、1→2 になれば研究成果発表の状況は大きく改善されるであろう。そのためには､学部レベルもしくは学科レベルで個々の教員のパフォーマンスのデータを把握し、パフォーマンスが低い教員に対しては「指導」を行うのも一手ではないかと思う。それに加え、不必要な会議等の雑務はなるべく削減し、研究（および教育）に専念できる時間を確保する必要があろう。

B 委員：評価点［３］
コメント：研究活動の状況把握や検証する取組の体制はできている。また、組織的な研究の推進を図っていることが認められる。
詳細な分析報告からは、研究活動が活発に行われていると思われる。

C 委員：評価点［３］
コメント：研究組織においては、大学院の工学系教員、電子工学研究所、イノベーション社会連携推進機構の教員と各部局間の連携がとれていて、適切な体制が整備されていると思われる。
研究活動については、研究成果発表状況が平成 29 年度から平成 30 年度にかけてはやや減っていることや、原著論文数においても平成 25 年度から比べて平成 29 年度は減ってきているため、各教員に対して、更なる努力を求めていく必要がある。ただ、共同研究実績においては全国的にも高い水準であるとのことはすばらしく、今後とも地域の企業との連携を進めていってほしい。

D 委員：評価点［２］
コメント：共同研究の金額が停滞している。
浜松という地の利を生かした提案型活動をもって活性化させるべき。

E 委員：評価点［３］
コメント：研究体制組織は、適切に構成されており、異分野との連携や部局間での連携が取りやすい体制となっており、しっかり機能していると判断する。
研究活動の問題点を改善するための活動は毎年行われているが、ここ数年研究成果指標としての学会発表数や論文数、特許出願などが減少傾向にあり改善の取り組みが適切であるか評価出来る資料が必要ではないか。
一方で研究費補助の件数、金額及び受託研究の獲得金額などを見ると研究の質は高いものと評価できる。
世界をリードする、世界に貢献できる研究体制構築のためにも、研究の成果をもっとマスコミも活用して社会にアピールして、研究資金の獲得活動を展開すべきである。

【基準１２】地域貢献活動の状況について

本学及び工学部の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

A 委員：評価点［４］
コメント：「地域志向宣言」を行うのみでなく、実際に地域住民への教育サービス、大学開放事業、産学連携を積極的に推進しており、大いに評価できます。

B 委員：評価点［４］
コメント：地域住民への教育サービス、学習機会の提供が活発に行われており、地域への貢献度は、大きいものと思われる。

C 委員：評価点［４］
コメント：静岡大学は「地域志向大学」と宣言して取り組んでいることでもあり、「知の拠点」として社会に貢献するという目標の中で進められていることは素晴らしい。
高等学校への出張授業や浜松ダビンチキッズプロジェクトなど、地域の若い世代に対して、科学を通して自分で考え探求する力を教えていることはとても有りがたい。
また、産業界との連携については、イノベーション社会連携推進機構が窓口となって共同研究を活発に展開されていて評価できる。

D 委員：評価点［４］
コメント：ダヴィンチキッズプロジェクトなど、子供から巻き込む活動はすばらしい。
ＩＴエンジニアの東京一極集中は、企業にとっても大問題であり、地元企業、自治体を巻き込んだ活動を期待する。

E 委員：評価点［４］
コメント：地域志向大学宣言により地域社会貢献活動が具体的に公開され地域の人達と学生及び職員が相互に啓発しあう多くの活動が展開されているのは大変評価できる。
これらは参加者からのアンケート結果からみても高い満足度が得られている事を見れば大きな成果を上げていると言える。
地域の小中高生への教育サービスは、地元学生が本校を目指す事にもつながり、一層の強化を期待したい。
社会連携の取り組みの中で、生涯学習部門との連携が旨く取れていないことに対する原因分析と対策の検討が必要である。

【基準１３】国際化の状況について

工学部の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

A 委員：評価点［４］
コメント：ABP および SSSV の取り組みはまことにすばらしい。さらにこの活動ならびに関連活動を発展させてほしい。
・可能な限り ABP および SSSV を拡大発展させてほしい。さらに、ABP および SSSV に関連させた活動を活発化することで、日本人学生の英語コミュニケーションを含む国際化の向上を図ってほしい。たとえば、SSSV では企業の海外オフィスへの派遣も積極的に行ったらよいのではないか？
・国際交流はともすると教員個人の活躍で進展する場合が多い。継続的、持続的に国際交流を盛んにするためには、グループで行うような仕組みが必要である。是非、点から面の取り組みへの移行を図ってほしい。

B 委員：評価点［３］
コメント：国際化推進のための活動が行われている。
さらに、その取組の成果が、期待した水準に達しているかどうかの検証とさらなる事業の活用推進に向けて、どのような働きかけができるのか、検討していただけるとよい。

C 委員：評価点［３］
コメント：平成 27 年度から開始された「アジアブリッジプログラム」において、インドネシア、ベトナム、タイ、インドの留学生を受け入れていることは、これらの国で事業展開している地域の企業との連携が期待できる。
教育目標に、国際感覚を身に着けることとして国際化に取り組まれているが、学生の英語力はまだまだ弱いところもあり、更にＳＳＳＶプログラムや外国人教員数の充実に努められたい。

D 委員：評価点［４］
コメント：静大工学部の差別化ポイントとなる。
ＳＳＳＶを全学生に課すなどの展開を期待する。
ＡＢＰは大きな目標設定したらどうか？
・インドも含めたアジアネットワーク
・企業インターンを強めて就職先の確保
・全学生の 10％～20％程度へ（100 人？）

E 委員：評価点［３］
コメント：ここ数年は ABP NIFEE　SSSV 等国際化への取り組みが着実に実施され国際交流が大きく進展していることは評価に値する。
アジアからの留学生受け入れ体制はかなり整備されてきているが、日本人学生の海外派遣はまだまだ色々な取り組みが必要である。
入学の早い時期から海外へ行く事の必要性を教えていく事も必要と思われる。
国際化が進んでいる他大学や法人等との連携も検討されたらと思う。

総合評価（全体を通してのコメントをお願い致します）

A 委員：

コメント：教育、研究、地域貢献、国際化に対し、静岡大学工学部が真摯かつ積極的に取り組んでおられることが分かりました。今回の評価委員会では、産および官の立場からアドバイスおよび批判をいただくことができました。学界の当方から見ても、いずれのアドバイスならびに批判は建設的なものであり、今後の静岡大学工学部の向上に大きく貢献するものであります。当方も学の立場からいくつかコメントをいたしましたが、それも含め是非、これらコメント・批判を熟考いただき、改善のためのアクションに活かしていただきたいと思います。

今後の静岡大学工学部の更なる発展を願ってやみません。

B 委員：

コメント：１から１３までの各基準について、さらに観点を設定し、状況や分析結果、根拠理由を記述し、加えて、各種統計、調査資料、添付資料等により自己評価がなされており、外部評価を行うに十分な資料を準備していただいたことに、まずお礼を申し上げます。

全体として、自己評価のとおり、各観点について、適切に実施されていることが認められます。それは、県内はもとより、全国から多くの受験生から、進学したい大学として選ばれ、また、企業からは、期待される学生として求人が多いことに表われているように思います。

さらに、学生の「学びの実態調査」、企業等就職先からのアンケート調査からも同様のことが読み取れます。

今後、教育の目標に掲げる「国際的な感覚を身に付け」の部分について、学生のアンケート等で、自己評価が高まることを期待します。

C 委員：

コメント：ものづくりを基盤にグローバルに活躍できる基礎力と実践力を身に着けるために、次世代ものづくり人材育成センターを入口にして、各専門分野への連携がとれた実学重視の教育が行われていることは高く評価する。

また、地域のものづくり企業と連携した共同研究や子供や若者の人材育成への貢献など、地域に開かれた大学としての活動も大変素晴らしい。

現在、人口減少・少子化に加え、若者の地方から東京への一極集中が進むなかにおいて、地方の大学は、いかに魅力や特色を打ち出していくかが求められているため、今後、世界に誇れる静岡大学工学部の強みを磨くとともに、きらりと光る大学を目指してさらに活躍されることを期待する。

D 委員：

コメント：少子化や東京への一極集中に伴い、地方国立大学の地盤沈下を心配しております。

国際化への取り組みなど、素晴らしい活動を展開していますが、“ものづくりの町浜松”を前面に出して差別化を図る事を提案します。

・“光”“音”“ロボティクス”など浜松の優良企業と協働し“とがった Creative な技術者”を育成する。

・地元自治体、小中高などと協働し“浜松育ちの技術者”を育成する。

・アセアン・インドとのネットワークを繋ぎ、大学・企業・学生の 3-Win System を構築する。

E委員：

コメント：大学の理念、目的として，ものづくりを基盤とした教育方針、方法を明確に打ち立て、取り組み事項も理解しやすいものである。
取り組みの良し悪しは、結果として目標とした学生が育成され、社会に貢献できる研究成果が出たか否かに現れるので、そういった視点からは活動は適正であると評価できる。

今回の評価は短期間での資料と学内観察であり、評価には限界があり出来れば各委員会で取り組んでおられる改善活動についてどんな課題や提案が寄せられ、どの様な取り組みを為されたのか、差し支えない範囲で自己評価報告書に記載して頂くともう少し的を得た評価と提案が出来るのではないかと思われる。
次世代ものづくり人材育成センターの教育現場を見て、工学部が目指す仁愛を基にした人材育成が、行われている事を目の当たりにしてこれは全国の受験生に発信すべきであると感じました。
現在浜松医大との統合が進められているが、是非その魅力を全国に発信して、より卓越した素質を持った学生を集めて、世界に貢献出来る特色ある大学を構築してほしい。

Ⅵ. あとがき

5 月 27 日に開催された外部評価委員会では、静岡大学工学部の教育研究活動につきまして、平成 25 年度から 29 年度の 5 年間を中心に、学外の有識者の方々から評価をしていただきました。工学部評価実施委員会では、外部評価のための基礎資料となる自己評価報告書を、昨年度から今年度にかけて作成し、諸々のデータや資料の収集・整理と分析を行いました。外部評価委員会当日にいただきました、外部評価委員の方々からのご意見ならびに、後日送られた外部調査結果調査票におきまして、自己評価書の各項目に対して、評価できる点と改善すべき点も含めて、多くの励ましのお言葉を頂き、評価実施委員会一同、作成の苦労を思いながら、今後につながるご意見を頂いたことが大きな喜びです。

特に、ABP や SSSV などの学生が海外とのつながりを深める活動への評価や、次世代ものづくり人材育成センターやリニューアルした図書館など、ものづくりを基盤とした実学重視の教育・研究の充実に向けた新たな施設、設備が評価され、専門教育段階でのものづくりを意識した教育が成功していること、さらにそれらの取り組みの結果、社会に期待される人材が供給されているという評価をいただきました。また浜松市における産学連携の推進や、理科教育への貢献など、地域貢献も十分であり、「地域社会と協同し、その繁栄に貢献する」という大学の中期目標を十分達成しているという評価をいただきました。一方、国際化の取り組みは評価できるものの、英語能力の向上に改善が必要であるとのご指摘は、工学部の問題点として痛感しているところです。また、年間の研究論発表数が減少しているというご指摘はごもっともであり、教員自身の改善の努力が必要であると感じています。今後は、ABP や SSSV の充実、英語教育の充実を軸に、市民としての見識も含めて一層の人材育成に励みたいと思います。

外部評価委員会の開催にあたり、数多くの方々にお世話になりました。特に、外部評価委員の皆様におかれましては、ご多忙中にもかかわらず、大部の自己評価報告書を事前に目を通していただき、委員会席上でのご議論および 後日お寄せいただいた外部評価票により、数多くの貴重なご意見、ご指摘を賜りました。また工学部ならびに関連組織の教職員の皆様には、自己評価書作成のための資料・データの提供や収集など種々ご協力をいただきました。この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

令和元年６月２７日

平成 30 年度工学部評価実施委員長

金 原　和 秀